

特別寄稿

墓碑の方向に秘められた思い

佐野真規

静岡赤十字病院 外科

要旨：静岡市は徳川家康が幼年期と老年期を過ごした場所として知られている。そのため、現在も徳川家に関する多くの史跡や墓碑が存在する。墓碑には故人の思いがいろいろな形で込められていることが多いが、今回は墓碑の「方向」に注目した。静岡市内に存在する徳川家康に関連した墓碑の中で、墓石の「方向」に重要な意味を持った、①徳川家康・②榊原照久・③井出八郎右衛門の三つの墓碑について考察する。それぞれの墓は、墓石の方向を考慮して建てられているが、その事実はあまり知られていない。多くの人が墓碑に興味を持つことを目的とし、これらの墓について報告する。

Key word：墓碑・久能山東照宮・徳川家康・榊原照久・井出八郎右衛門

I. はじめに

江戸時代初期（西暦 1607～1616 年）に、静岡市は日本の中で重要な場所であった。慶長八年（西暦 1603 年）に初代将軍として江戸幕府を開いた徳川家康は、その二年後に將軍職を徳川秀忠に譲り、自らは「大御所」となり、慶長十二年（西暦 1607 年）より駿府城（現在の静岡市葵区城内町・追手町・駿府町）に移る。そのため静岡市には、徳川家に関係する史跡や、墓碑が残されている。

墓石には故人の思いが反映されていることがある。最近ではサッカー・ゴルフ・バイク・茶道など、故人の趣味を反映した墓石を目にすることもある。今回は、墓石の「方向」に注目し、そこに秘められている故人の思いについて考察する。静岡市内の墓碑の中で、徳川家康と、その家臣である榊原照久、井出八郎右衛門の墓について以下に報告する。

II. 徳川家康公神廟

徳川家康公の人物伝について詳しくは諸書に譲る。徳川家康公の死因については、胃癌説¹⁾や鯛の天麩羅による食中毒説²⁾など諸説が伝えられている。しかし、元和二年（西暦 1616 年）四月初旬頃より体調を崩し、病床に臥せていたのは確かなようである³⁾。四月十七日巳刻（午前十時頃）に徳川家康は駿府城にて、七十五歳の生涯を閉じる⁴⁾。その遺命は「遺骸を久能山に葬り神道で神位にて遷座するこ

と、葬礼は江戸増上寺にて行うこと、三河大樹寺に位牌を立てること、一周忌の後に日光山に小堂を建て勸請すれば関八州の鎮守となろう。」とされている^{1, 3)}。遺骸はただちに久能山に移され、神廟が「西」を向いて建てられた。その理由は「都の帝に敬意を払うため」や「生誕の地である故郷の岡崎（現在の愛知県岡崎市）を望むため」という遺命によると考えられている⁴⁾。また江戸幕府の西国の統治に不安があり、死後も西国を監視するために、西を向いて神廟を建てるようにという遺命を残したとも伝えられている⁵⁾。家康の死から約 250 年後に、倒幕に尽力した志士達の多くが、西国の薩摩藩、長州藩の出身であることは大変興味深い事実である。

遺命に「一周忌の後に日光山に小堂を建て勸請すれば関八州の鎮守となろう」という一節がある。家康の側近であった南海坊天海は「家康公が藤原鎌足の多武峯改葬の例にならい、日光山改葬をも遺言した」と主張したため、下野国日光（現在の栃木県日光市）への神柩移御が決定され、元和三年（西暦 1617 年）三月十五日に靈柩が久能山を出発したと伝えられている^{3, 4)}。しかし遺体が本当に日光に移されたのかは疑問であり、それを否定する説もある。一年後では遺体は腐乱したであろうし、移動による遺体の損傷も恐れられ、御霊移しのみを行い、遺体は現在も久能山に眠り続けているという説もある⁵⁾。また、西国を中心とした反徳川勢力に墓を発かれるのを防ぐため、彼らを欺く目的で改葬を命じたので

あり、遺体は移していないという説もある²⁾。さらに久能山東照宮神廟の前に建立されている燈籠に「元和三年四月十七日江戸鋳物師大工椎名伊予」と刻まれており、これが江戸幕府により建立されたものならば、改葬した直後に、以前に神柩のあった場所に燈籠を建立することは腑に落ちない⁴⁾。また、久能山に遺体を葬った時の祭文には「公の御像を駿州有度郡久能の奉葬高嶺に…」と明記されているが、日光改葬の際の宣命には「崇其靈氏東関乃奥成尔大宮柱太敷立氏云々」とあるのみで「葬」という語がなく、本当は遺体を日光に移してはおらず、庶民は欺けたが、朝廷に対しては虚偽の奏上はできなかったという説もある⁴⁾。

真偽はともかくとして、古来より「魂魄」という語があり、「魂」は陽の精気を表し、「魄」は陰の精気を表すとされている。「魂」は位牌に宿り、「魄」は屍の眠る墓に宿るとされ、位牌と墓の両方を祭ることで初めて供養が済むとされる。現在でも仏壇とお墓の両方を祭り、祖先の供養を行っているように、日光が「魂」の祀りを行うための仏壇に相当する場所であり、久能山が「魄」の祀りを行うためのお墓に相当する場所であり、双方の祭礼を行うことで家康公の霊が慰められるという考え方が妥当かもしれない⁴⁾。

久能山東照宮の神廟は、当初は木造檜皮葺であったが、寛永十七年（西暦 1640 年）に石造りに改められ⁴⁾、現在の形となった。350 年以上が経った現在も、その墓碑は多くの想いを含み、「西」を見つけて建てられている（図 1）。

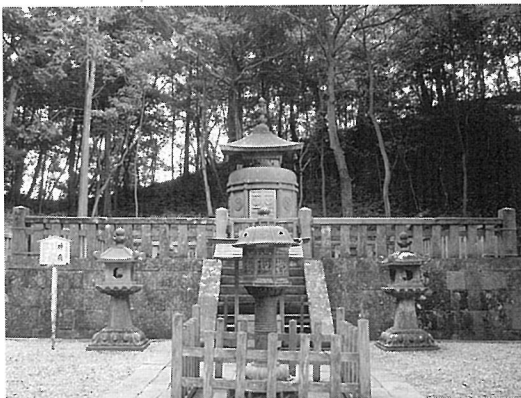


図 1 徳川家康の墓（久能山東照宮神廟）

久能山東照宮（静岡市駿河区市根古屋 390）にある徳川家康公の神廟。東照宮本殿の北側にあり、西を向いて建てられている。

Ⅲ. 榊原照久公の墓

まず榊原氏及び、榊原照久公について説明する。榊原氏は清和源氏義家流足利氏支流の仁木義長六代の孫に当たる「仁木次郎七郎利長」が、室町時代に伊勢国菟志郡榊原（現在の三重県津市榊原町）に住み、地名を姓としたことを起源とする。その後、利長三代の孫「榊原七郎右衛門清長」が伊勢国から三河国（現在の愛知県東部）に移り、松平広忠（徳川家康の父）に仕える。以後、榊原家は徳川家譜代の家臣となる²⁾。

清長の子・長政は徳川家康に仕えるが、永禄五年（西暦 1562 年）に没する。長政に二子があり、長男・清政、次男・康政は共に家康公に仕える。次男・康政は常に側近として家康公に仕え、数々の戦功をたて、徳川四天王の一人に数えられ、天正十八年（西暦 1590 年）に上野国館林（現在の群馬県館林市）に封ぜられ、十万石を領する。一方、長男・清政は家康公の長子・岡崎三郎信康に従属する。しかし信康が謀反の疑いをかけられ、天正七年（西暦 1579 年）に自刃したため、清政は浪人となり、康政の領地・館林で閑居となる²⁾。

清政には長男・清定、次男・清久（後の照久）があるが、長男・清定は病弱のため家督を継がず、叔父の榊原康政の家臣となる。次男・清久は慶長五年（西暦 1600 年）伏見において家康公におめみえし、以後、家康公の側近となる²⁾。

上野国・館林で閑居していた清政であったが、慶長十一年（西暦 1606 年）十二月、駿河国久能山城（現在の静岡市駿河区根古屋）の城主に任命される。しかし入城後、間もなく清政は病に倒れる。家康に従い伏見に赴いていた次男・清久は看病のため久能山城に向かう。病は一時改善したため清久は伏見に戻るが、病状が悪化し清政は慶長十二年（西暦 1607 年）五月二日に没し、駿府宝台院に葬られる（享年六十二）。父の死後、清久は久能山城の城番を命じられ、千八百石を賜る^{2, 6)}。

将軍職を譲り、家康公が駿府に隠退すると、清久は新鮮な魚介や、初物の野菜等を献上し、常にまめまめしく伺候したと伝えられている²⁾。元和二年（西暦 1616 年）、駿府城にて家康公が病に倒れると、常に御病床近くに侍した者として、秋元但馬守泰朝、板倉内膳正重昌、松平右衛門大夫正綱、そして榊原清久の名前が挙げられている。そして、家康公は清久の膝を枕に薨去されたと伝えられている²⁾。

遺言にて、霊柩は久能山に納められ、清久を斎主として式で葬儀が行われる。清久が日頃より奉仕を怠らなかつたため、斎主という大任を任されたといわれている。以後、清久と社僧四人が、久能山東照宮全般の支配を任されることになる。

元和三年（西暦 1617 年）八月に、清久が伊豆国北条の旅亭で昼寝していると、夢の中に大権現（家康公の神号）が現れ、東照宮から一字をとり、清久から「照久」に改称する御告げがあり、以後は照久を名乗る²⁾。久能山東照宮神主及び総御門番の役目を務めた榊原照久は、正保三年（西暦 1646 年）八月七日に、久能にて六十三歳の生涯を閉じる⁷⁾。久能山には西暦 600 年頃より久能寺が創立されていたが、武田信玄が駿河に侵攻し、久能山城を建てる際に、久能寺は鉄舟寺（現在の静岡市清水区村松 2188）に移されるが、久能寺の一部は久能山の麓に残っており、照久の遺骸は久能寺の塔頭であった浄念寺に葬られる⁸⁾。遺言に従い、墓碑は久能山東照宮の方向を向いて建立される²⁾。寛文四年（西暦 1664 年）に、照久の長子・照清により浄念寺は、父の名をとり「照久寺」と改められる。照久の後を継ぎ、照清は久能山東照宮神主及び総御門番を務めたが、寛文四年（西暦 1664 年）に神主の職を辞し、久能山総御門番のみとなる²⁾。

承応三年（西暦 1654 年）三月には久能榊原越中守組が組織され、代々榊原家は久能山総御門番として、久能山東照宮の警衛を務めることとなる。明治維新で旧制度が改革され、明治元年（西暦 1868 年）三月に久能榊原越中守組が解体され、久能榊原家が久能山総御門番の任を解かれるまで、214 年間に渡り、久能榊原家は東照宮を守り続けていたのである⁹⁾。

照久寺には、現在も久能榊原家歴代当主の墓碑が建ち並んでいる。近年に無住となり一時は荒れていたが、現在は宝台院の管理下となり、照久寺から、宝台院別院と改められた¹⁾。本殿の北東に榊原家墓所がある。墓所の入口は南側を向いており、多くの墓石が入口の方向を向き、南側を向いて建てられている。その中で唯一、入口の方向を向かず、東側を向いている大きな五輪塔がある。これが榊原照久の墓である。この墓碑は約 350 年が経った現在も、主君・徳川家康公への忠義を貫き、現在も久能山総御門番として、久能山東照宮を静かに見守り続けている（図 2, 3, 4）。



図 2 久能榊原家墓所

久能榊原家墓所は宝台院別院（静岡市駿河区安居 291）にある。本殿の北側が墓地になっており、境内の北東に榊原家墓所がある。図は墓所入口からの写真である。多くの墓碑がこちらを向いている中で、右後方に見える石柵に囲まれた照久の墓碑だけは右側（東側）を向いている。



図 3 榊原照久の墓（正面）

榊原照久の墓の正面。榊原家墓所内の北東に位置する。この墓碑だけが石柵に囲まれている。久能山東照宮の方向を向いて建てられている。

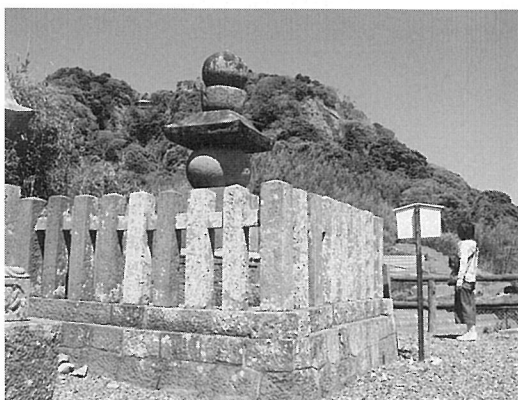


図 4 榊原照久の墓（後面）

榊原照久の墓の後方からの写真、墓の向いている先には久能山東照宮が見える。現在も時々、人々が訪れ墓石の見つめる方向を眺め、照久に想いを馳せる。

IV. 井出八郎右衛門の墓

家康公の死に関連した人物として、井出八郎右衛門に注目する。井出八郎右衛門は、若年の頃より家康公に厩の舎人（乗馬の口取りなどを勤めた役人）として仕え、三百石の封禄を得る。家康公の長年の御恩に報いるため、家康公の死の二日後に、石蔵院の門前で割腹し殉死する^{10, 11)}。殉死は江戸初期に流行し、島津義久や伊達政宗の死に際しても多くの家臣が殉死している。しかし主君の子孫に仕えることこそが、奉公であるという考え方から、寛文二年（西暦 1662 年）に殉死は禁止される。八郎右衛門の墓はその死から約 100 年後の、正徳五年（西暦 1715 年）に子孫によって建てられる。殉死の禁令を顧慮し墓碑の建立を遠慮してきたのだろうか。井出八郎右衛門について記載された資料は少ないため詳細は不明だが、その墓石が久能山東照宮の方向を向いて建てられていることは、偶然ではなく故人の思いを考慮していると想像させる（図 5, 6）。



図 5 井出八郎右衛門の墓（正面）

石蔵院（静岡市駿河区安居 272）の南にある井出八郎右衛門の墓。境内からやや離れた場所にある。墓碑の左に頌徳碑も建てられている。保存状態は良好で、石碑の文字も判読可能である。

V. 結 語

墓碑の方向に秘められた故人の思いについて考察した。墓碑を参拝するときその方向にも注目し、そこに秘められた意味を考え、故人に想いを馳せることは墓碑参拝の醍醐味といえる。今回は静岡市の中心街から近く、参拝しやすい墓碑を選んで報告した。興味をお持ちになった方は是非、参拝をお薦めする（図 7）。

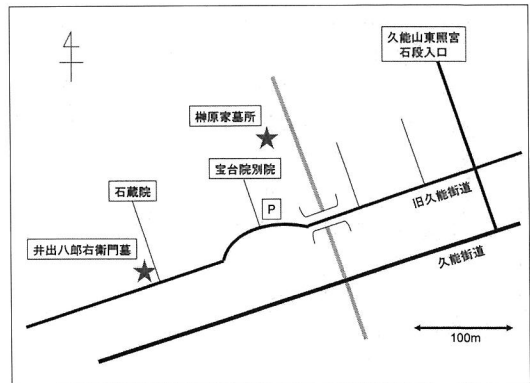


図 7 久能山東照宮付近の地図

久能山東照宮の登り口から、旧久能街道を西に約 300 m 進むと、宝台院別院（榊原照久の墓）がある。駐車場があり、そこから境内の北東へ徒歩で進むと墓所がある。宝台院から旧久能街道を更に西に約 100 m 進むと井出八郎右衛門の墓がある。駐車場はない。

参考文献

- 1) 秦山哲之. 静岡市史編纂資料（二）（静岡市）. 東京：歴史図書社；1979. p.378-408.
- 2) 久能山東照宮社務所. 久能山叢書第二編（久能山東照宮社務所）. 静岡：久能山東照宮社務所；1972. p.8-16.
- 3) 小林 明. 久能山東照宮と徳川三代. 季刊静岡の文化 1999；59：76-9.
- 4) 静岡市役所. 静岡市史・近世（静岡市役所）. 静岡：静岡市役所；1979. p.195-200.
- 5) 加藤忠雄. 静岡の歴史と人物—加藤忠雄著作集（黒澤 脩，加藤美代，宇草多紀子，加茂昌子，加茂悦爾）. 静岡：加藤忠雄著作集刊行会；1985. p.101-104.
- 6) 榊原氏墓群について. 静岡：宝台院別院
- 7) 大石益光. 静岡県歴史人物辞典（静岡新聞社出版局）. 静岡：静岡新聞社；1991. p.213.
- 8) 櫻井 廣. 駿府の歴史. 静岡：静岡市観光協会；

1989. P.137.

9) 窪田正志. 久能榊原越中守組の朝廷帰順前後.
地方史静岡 1988; 第十六号: p.127-133.

10) 川崎文昭, 静岡市歴史散歩, 静岡: 静岡新聞社;
1990. p.118-125.

11) 頌徳碑. 静岡: 石蔵院; 1962

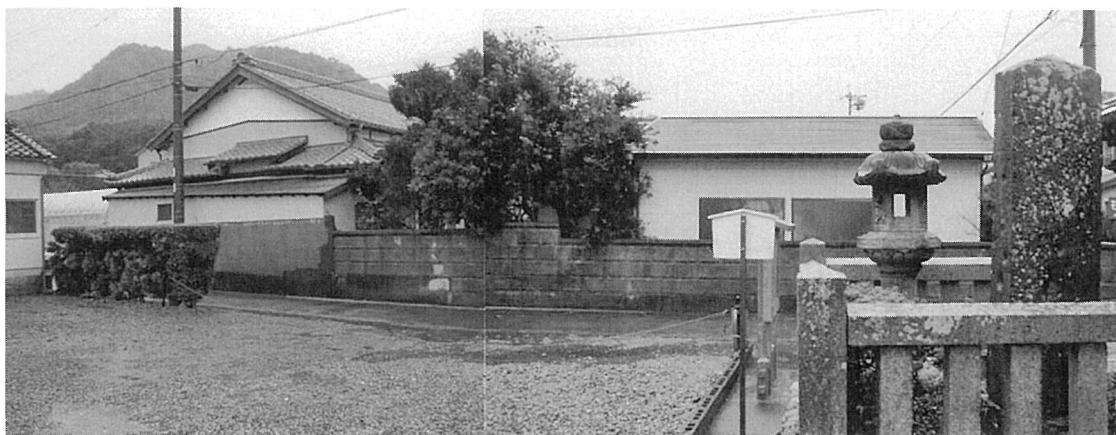


図6 井出八郎右衛門の墓（後面）

井出八郎右衛門の墓の後方からの写真. 遠方に久能山が見える. 久能山の方向を向いて建てられているのは, 故人の思いを酌んでいると思わざるをえない.

The Significances of the Direction of the Tombstones

Masaki Sano

Department of Surgery, Shizuoka Red Cross Hospital

Abstract : Ieyasu Tokugawa lived in Sizuoka city in his boyhood and his old age. Therefore Sizuoka city is rich in historic remains and tombs about the followers and the family of Tokugawa. Dead people include their minds in their tombs. In this study, I pay attention to the direction of the tombstones. I selected three tombs, Ieyasu Tokugawa, Teruhisa Sakakibara and Hachiroemon Ide. These tombs have important significances in their direction of the tombstones. But many people don't know these significances. Reading this paper, I want a lot of people to be interested in tombs.

Key word : tomb, the Kunouzan-Toshogu, Ieyasu Tokugawa ,Teruhisa Sakakibara, Hachiroemon Ide